

## つきあう——〈交際〉の文化人類学——

### 渡邊欣雄

#### 一 異文化からものを考える——文化人類学の課題

今、ご紹介にあずかりました渡邊でございます。私はこの席で毎週講義をしたことがあり大へん懐しく五年前のことと思い出します。跡見では講師紹介にありましたように文化人類学を教えていました。現在、武蔵大学に居ります。が、移ってからも今日の話にあるようにおつきあい、ここに時々来させていただいております。今日もそういう縁がもとで話をすることになりました。つきあいは非常に日常的な表現であります。文化人類学の立場から考えると、「つきあい」という日本語でさし示されている対象領域は大きな問題をふくんでいます。

ところで文化人類学——これは最近だいな茶の間に広まりつつあるとはいえ、まだ十分に理解されていない、それほど市民権が得られていない分野です——とは、あくまで異文化からものを考える、そういう学問です。ここではま

ず文化人類学がどういう視点からものを考える学問なのかということを理解していただくために少し実例をあげてお話ししましょう。

今年、私はマレーシアの中国人社会の調査に行ってきた。赤道に近い首都のクアラルンプールで行われた旧六月二四日のある神様の誕生日のお祭なんです。それを取材して、その後小さい紙をいただいたのです。この袋の中に日本でいえば護符のようなもの、御守みたいな札が入っていたり、米が入っている。こういうものをお祭が終わるときに渡されたわけです。これを日本で紹介するとき、一体どのようにして皆さんに分かってもらえるかということが実は人類学の課題です。異文化からものを考えるということは、これに対する理解がなければならぬということ、もう一つは日本人が理解できる言葉に翻訳して話さなければならぬということです。すると、この札は御守とか護符という言葉を使えばそれでいいのですが、それだけ

ではちょっと分からないという難しい問題があります。これは今日の話の難しさに関わります。でもこれはまだ物です。すから比較的紹介し易いのです。

ここに「希求平安」と書いた紙があります。これは台湾で使われているお金です。そう言ううとまた翻訳が必要になります。これは最高の神にあげるお金です。神と人間のつきあいのなかで必要欠くべからざる金です。これを燃やして天にあげる。こういうのは日本の本土の文化の中にありませんから、どう翻訳するか非常に困る。学者はこれを日本語で「紙銭」と訳していますが、これでは分かりません。ましてこれは向うの人が総称しているような名詞ではありません。これが誤解になっても理解にならないという僕も非常に困る問題です。本題の文化人類学の悩みの一端を紹介したわけですが、以下では翻訳できない所は実例や図表で補いながらお話ししようと思います。

## 二 つきあいと経済——二つの実例から

つきあいとは何かについて、とりあえずそれは経済学の問題であろうと性格づけておくことができます。まずこの点から考察してみましよう。

先程も話しましたように、今年はマレーシアへ調査に行ってきました。クアラルンプールから北上しまして、シン

ガポール、ボルネオの北部を回り、台湾に寄って二ヶ月半かけて帰って来ました。この調査で僕は初めてマレーシアに行ったわけですから、西も東も分らないという状態でした。文部省のお金をもらって行ったのですからなんとか調査をして中国人の社会を理解しなければなりません。そこでまずマレーシア各地を一週間から一〇日間、滞在しながら歩いてみました。その時、クアラルンプールから北へ二〇〇キロ位行った都市イポまでどうやって行くかという問題が生じました。バスも鉄道もあるのでありますが、日本と違って鉄道は一日に六本かそこいらしかなく、タイまで行きますけどあてにならない位遅いので使えません。バスも荷物が多いのでたいへんですからタクシーで行こうと考えたわけです。

問題はいくら位で行くのかということでした。相当高ければ諦めなければならぬし、安ければ何とかなるうと交渉を始めました。一番初めに向うの運転手はイポまで一八〇ドルかかるといいました。マレーシアの一八〇ドルはほぼこちらの一万八千円です。実は二〇〇キロという距離は東京から千葉県南部または長野県まで行けますから、日本の感覚ですと非常に安いのですが、向うでは非常に高い。僕は一応外国経験はここだけではないので知っていましたから、値切ったわけです。一八〇ドルでなんか乗らない、他のタクシーを捜すと言って一〇〇ドルに下げてもらいま

した。後で聞きますと中国人であれば二五ドルで行けるそうです。僕は一〇〇ドルは非常に安いと思つたのですが、実はとても高かったのです。このことを聞いたので今度はペナンへ行くとき、イボから約一五〇キロありますから、一〇〇ドルでは絶対に乗らんということでタクシーの運転手とまた交渉しました。初めはクーラー付だから二〇〇ドルだとふっかけてきました。これはおかしいわけです。二〇〇キロで一八〇ドルでしたから、一五〇キロでももっと安くていい。クーラーなんていらぬから二〇ドル位しろと逆にこちらからふっかけましたら、今度は向うが怒りまして二〇ドルだったら乗せないとはいはるわけです。他のタクシー会社を知らないし、ホテルのフロントを通じて呼んでもらつたものですから、ホテルとの関係を悪くすることを避けるために、随分時間がかかりましたが結局五六ドル、五千六百円分という半端な数になりましたが、クーラーなしで行くことになりました。クーラーを消して窓を開け、熱帯のものすごい熱風が入ってくるのをがまんしての五六ドルでしたが、相場が二〇〇キロ〓二五ドルだとすれば実は、もっと安いはずです。

もう一つの経験として、ペナンで非常に親しくつきあつた中国人がいました。向うの中国語と英語が分かりにくかつたのですが、調査するときに通訳になつてくれました。彼のおかげでいろいろなことが分かりました。その人とい

ろいろな所へ行きましたが、彼と行くとタクシーの料金も安くしてもらいましたし、カレーそばなんかを何度か食べたのですが、ただなんです。なぜかと訊ねると非常に困る。食べたのだからと言っても絶対にお金を取らないのです。君たちは自分の友人である。友人同志の関係においてはお金を払わなくてもよいということになります。その料理を作ってくれている人とは、その中国人を媒介としてつきあつてみますとお金がかからないのです。そこで僕も随分ご馳走になりました。

この二つの実例は経済学的にみると全く矛盾しています。ものに値段がなく、他方値段がありすぎるわけです。だからここに有るものの値段はあつてなきものです。どうしてこういうことが起こってくるのか、つまり経済学的な問題として対象にすべきところが、ある場面ではゼロとなり、ある場面でいくとたいへんな問題がまた起こってくる。たとえばタクシーの料金が高くなつたり安くなつたり、どういふことなんだろうと中国人に聞いたのですが、一般的に日本人には高く売るといふことになっている。なんでもかんでも二倍から三倍ふっかける、皆そういう習慣になっている。友だちになつてしまえば、日本人どうのに拘らず、中国人並につきあう。中国人並というのは友人であれば、ただであるということもでてくる。これは今日の話の重要なポイントになつてくるのですが、日本人は、要するにマレ

一の中国人にとつて一番遠い関係にある人間である。親しくない間柄、むしろ敵であると断言してもいいと思う。敵であるからこそ、日本人がマレーで外国人として接しなればならないときには、必ず日本軍の話がでてきて、必ずどこか現地民が殺された場所や戦没者をまつる所へ行つて拜めとか頭下げると言われる。僕は友人でしたから日本人としては少し違う待遇でしたが、現地では日本人はまだ敵に等しいわけです。敵なら値段を相当ふっかけてもいいわけです。親しくなれば敵でなくなりますから、値段がなくなつてしまふということも起る。つきあいによつて値段は決つてくるということになります。これはマレーシアだけの問題ではありません。香港でも台湾でも同じです。

かつての日本でもこういうことがありましたし、いろいろな文献にも出て来ます。以前はどういう値段を付けていくかという交渉があったわけです。それが今は公定価格とか称して予め決つているかのごとくですが、実はそうではない。本当は世界各国にこういう関係が山程あります。ヨーロッパといわずアフリカといわずやはり交渉・取引で値段が決る。つきあいはそういう問題と密接に関係があり、極端に言えば、つきあひを通じて値段がでてくることになるわけです。

### 三 つきあひと互酬性——互酬性の内容と種類

では、つきあひということをごとく考えたら良いかといふと、もう少し問題を拡げてみないと理解できないだらうと思ひます。

一定の人間関係をさすことばとして人類学には「互酬性」という言葉があります。分かり易く大和言葉に翻訳すると「やりとり」です。互酬性とは何か物をあげれば物を返される関係、あるいはことを行えば向うから返つてくるといった相互の行為の繰返し、物の移動をいいます。これは 'reciprocity' の翻訳語です。人間関係の中には必ず人間関係そのもののみでなく、そこには必ず物のやりとりがある。こうした関係を広く互酬性、やりとりと考えてみますと、つきあひは「やりとり」のうちの一つです。

次にやりとりの内容はどのようなものがあるのか考えてみましょう。大きく分けて「もののやりとり」(物的互酬性)と「ことのやりとり」(非物的互酬性)との二つがあります。前者は物質的なものが人から人へ渡る現象でこれもやりとりの一種です。ことのやりとりは何か行為としてあげる、してあげたということを示します。

またやりとりの行為を考えますと(一)譲渡行為・分配行為と(二)交換行為・営利行為とに二分されます。(一)「譲渡行為」は大和言葉の「ゆずり、あたえ、おくり」であり、あ

る人から他の人へ一方的にも、及びことが流れていく状態を意味します。贈物、それ自身が季節の名前である中元、歳暮や香典、結納といった物的互酬性の他、非物的な譲渡行為として「歓待」（もてなし）、「世話」「養育」などがあります。「分配行為」は「ゆずり、あたえ、おくり」の中の一つの現象で、一人に対してではなく複数の人間と「わかちあう」ことを言います。物的には「分与」（おすそわけ）あるいはもう少し完全に平等な「分配」として「分かち合い」があり、非物的には「共歓」「分担」がこれに含まれます。(二)もう一つは、一方的にも、やごどがある人へ行くのではなく、ピンポン玉のようにいったりきたりするという「交換行為」（とりかえ）がある。たとえば「贈答」には贈られる行為とり返しの行為が含まれています。「貸借」（かしかり）はまさにそうです。「交易」（あきない）すなわち物々交換のもう少し単純なものを考えてもらえば良いでしょう。「売買」は品物と品物を交換する。これもそうです。以上の物的な交換に加えて、非物的なものに「返礼」「相互扶助」「請負」「契約」があります。また、「営利行為」（かけひき）もこの広い意味での交換の一種です。これには「営利」（とりひき）「廉売」（やすうり）「賭博」（ばくち）「窃盗」（どろぼう）といった物的かけひきをはじめ、「交渉」（かけひき）「奸計」（わるだくみ）「背信」（うらざり）のような非物的かけひきが含まれます。

す。日常語とは意味のずれがあるでしょうが、完全に利益がないと成立しない関係を「営利」（とりひき）と考えます。「廉売」は安く売っても、なお利益が入る。「窃盗」は全く金を払わないで物を獲得しますが、一方的利益を生まず、泥棒には罪とかのマイナス点がつきます。これも一種の互酬性Ⅱやりとりです。罪と物を交換しています。

非物的互酬性の中には一方的にある人からある人へと渡され一方の人が完全に利益を得ますが、渡した人自体の利益は考えられない関係があり、それは特に親子関係に顕著です（養育）。「歓待」（もてなし）は自分の利益を考えずに相手にものをあげたり接待します。惜しみなくものを相手に与えることを損失と思わない状態です。これを公共的にしますと「福祉」の問題へ繋がります。お金をけずってフリカ救済基金に寄付する。これは自分たちの損失ですが、損失とは考えない、これが援助という問題です。「世話」もものでなくて行為ですが、一方的なものです。このようになてきますと交換の部分でもお返しがあり、助け合いがあり、広く考えていくと次第に「交渉」（かけひき）「奸計」（わるだくみ）にも発展します。こうして次には、やりとりの種類が問題になります。

アメリカの学者サーリンズが、このやりとりの種類を考えた場合、一般的互酬性、均衡的互酬性、否定的互酬性の三つに分けられると述べています (M.D. Salins, 'On the

Sociology of Primitive Exchange', in: M. Banton (ed.), *The Relevance of Models for Social Anthropology*, 1965).

(一)「一般的互酬性」は、もの、行為の質や量、価値にかかわらず、一方的に贈与、譲渡が行なわれることをいいます。日本語ではゆずり、あたえ、おくり、にあたります。これは「人情」を伴った行為です。何かしてあげたい、利益を顧みずしてあげたいという人への思いやり、そういうものを伴っています。

(二)「均衡的互酬性」はたいへん釣合いのとれたつきあい、これは同量、同価値のものが慣習的に決められた期間後ないしすぐに返還される行為と定義づけられています。あの人のお話で就職ができた。お世話になったのでお歳暮を贈ろう。どういうものを贈ろうかと考えるとき、均衡的互酬性の考え方に繋がります。なぜかという就職のお話は一方的なものです。その人から一方的に自分は利益を受けてしまった。だから感謝の気持を表したい、お返ししたいという気持からプレゼントすると、これは均衡的互酬性の問題になります。お返しをしなくても心理的にいいのならば、一般的互酬性です。ところが人によってはどうしても返さなければならぬ「義理」の関係の人がいます。そうすると世話と贈物との交換関係が成立します。その見かけ上の量はともかく、考え方の上では同質、同価値のものがやりとりされている状態のことをいいます。経済的なやりとり

もそうです。二〇〇円でタバコを買うことも実は均衡的互酬性の一部です。ところが本来二〇〇円のを二五〇円で売ってしまうと今度はかけひきの問題になります。

(三)贈物をもろう方にはなるべく少ない価値のもの、贈り手には多量のものを獲得する行為、これを「否定的互酬性」といいます。安売もこれです。自分たちは損をして、あなたたちにはこんなに安く売っているのだということはいへんな問題なのに、それでもなお儲けているはずですが、これは完全に「実利」的行為です。だから利益がなければ交換関係は成立しません。よく考えていただきたいのですが、結婚式に贈るプレゼントは実利的な関係ではありません。五千円贈ろうか七千円贈ろうか悩むのは人間関係の距離です。親しさの距離で考えたり、自分の立場を考えて決めます。葬式の香典もそうです。ところが品物を売るときには、多少の利潤がなければ生活できませんから、それを考えた上で売らなければなりません。これは一般的互酬性をはるかに越えたものです。受け手には少ない利益で、売った方は多くの利益を獲得できる、これが否定的互酬性であって、以上の三つが互酬性の種類です。

「つきあい」とは何かを考える場合、やりとりの一部である「譲渡行為」ができるのがつきあいであるかどうかについては日本語のニ、ニアンスの問題が入ってきます。我々の日常生活の中で親と子はずきあっているのか、今朝も家

内に訊ねたのですが、僕と家内の父はつきあっている関係かというところ、つきあいではないという。ではどういう言葉があるのかと言ったら悩んでいました。日本語の「つきあい」は関係概念ではありません。行為を指しますから、親子づきあいというのはおかしい。要するに、ものすごく親しくなりすぎると言葉の上でつきあいとは言えなくなってしまうのです。家族への土産なんかはつきあいの中のやりとりではありません。家族内の関係で行なわれているさまざまな行為はつきあいと言わない行為、何とか教えていたいただきたいのですが、そういう行為です。家族を越えると親戚づきあいが始まります。前に跡見の民俗文化研究調査会の助手であった中込睦子さんの論文「交際の構造分析のための試論」『社会伝承Ⅶ：人生儀礼と社会構造』、一九八三、所収）にあります。家族関係の中にはつきあいということがでてこない。つきあいは家族を越えたものでなければならぬ。——日本ではまさにそうです。

ただし家族のない社会がありますから、そういう社会では、この説明は使えないわけです。家族関係を越えた所でつきあいが始まるというのは困る。だからもう少し抽象的に言うと、ある程度密接に相互に日常活動を行なっている単位とかカテゴリーを越えてつきあう場合に、またそういう関係を越えて人間関係が維持される場合に「つきあい」という言葉が使われるということは、つきあいは「一般的

互酬性」には含まれない。換言すれば一般的互酬性の中のたいへん簡単な譲り渡し、なんの義理も感じない一方的な関係はつきあいとはいわないと考えられます。したがって一般的互酬性は「つきあい」の中から除外されなければならぬ。「否定的互酬性」を考えますと僕がマレーシアで経験したような多くの事例、運転手とタクシー料金のかけひきをする、値段が高くなったり安くしたりするのはつきあい関係ではありません。そうすると、「かけひき」の関係からはつきあいが出てこない。「わるだくみ」「うらぎり」をする関係はつきあいではない。だとすれば精神的な意味で同質、同量、同価値のものがやりとりされる状態において「つきあい」というイメージが喚起されるのではないか。どうも日本人の「つきあい」の概念の中心的部分は「均衡的互酬性」ではないかと考えたわけです。

さてサーリンズは部族社会、国家を形成していないような酋長のいる社会、酋长制社会といっています。そういう社会では互酬性と人間関係がどういう関係にあるのか述べています。彼によれば、一般的互酬性は、家族とは限りませんが、日常の上で一体となった関係の中に顕著にみられる。次第に人間関係は地域的に拡大します。リネージ領域（訳しますと「同族」に近いと思います）になると、一般的互酬性が薄れていきます。村落領域、村の中の関係は均衡的互酬性に極めて近い。また前述のようにマレーシア

で日本人は異人であり、外国人ですから、かけひき、わるだくみ、ぬすみなどの否定的互酬性が平気で行なわれます。台湾でも外国人のホテル代が二倍にはね上がっているわけは、外国人とはこういう否定的互酬性の関係でしかないからです。彼らとは言葉が通じなかったりして避けたり、なかなかつきあえないことがあったりする。これが否定的互酬性の始まりです。いったん「つきあい」が生じると、次第に親しくなつて何でもあげるような形になりますが、一般的互酬性の関係にはなりません。やがて向うから品物が返つて来ます。そもそも受け取る側が「つきあい」を一般的互酬性とはみなしません。外国人に対して「もてなし」を豊かにすることも決して一般的互酬性ではありません。

サーリンズは、各民族によって均衡的互酬性がリネージ領域にある社会もあるし否定的互酬性が村落領域にある場合もある、それはさまざまであると言っています。文化人類学は日本に限らず全ての文化を対象としますから、そこであらゆる文化で不変的だと考えられるのは、自分の内なる領域の中では「つきあい」という概念がつかえない。またあまり離れて全く人間関係がない状態だとつきあいがでてこない(あつても一過性のつきあいになつてしまふ)日本人の概念ではつきあいとは言わない(ということになります)。釣合つた関係、お世話をすれば返つてくる、そうい

う関係(「均衡的互酬性」に「つきあい」という言葉が使われる。つまりつきあいは人間関係によるということですから。

#### 四 人間関係の中のつきあい——トロブリアンド島との比較

まず人間関係(つながり)を抽象的にとりあげます。世界各地の人間関係を考えると、社会によって人間関係のち方が違います。日本だとか欧米では近い関係、遠い関係があります。この近い遠いはあくまで心理的な距離です。それを三センチとか一〇メートルのように計ることができれば楽ですが、自分から見て遠い近いということなのでそれは心理的なものです。これから述べるのは親戚関係についてですが、親戚関係こそ「つきあい」の原点なんです。これはどこの社会でも変わりません。

実は世界には遠い・近いという感覚でつきあっている社会だけではなく、第1図のような社会があります。マリノフスキーの調査で有名なトロブリアンド島の社会を対象にしたこのデータ(E.R. Leach, 'Concerning Trobriand Clans and the Kinship Category "Tabu"', in: J. Goody (ed.), *The Developmental Cycle in Domestic Groups*, 1958)によれば、そこには近い遠いという言葉がありません。どう



中間の円の人とは結婚しても良いが親は勧めない。最外円のタブーの人たちとは結婚してもいい、大いにしているいい関係です。またリーチによると、タブーに属する人とは一緒に村に住まない、敵になり殺してもかまわない関係です。その反対に最も内側は絶対に敵にならないという関係になっている。図の上の方に 'hamlet' と書いてありますが、

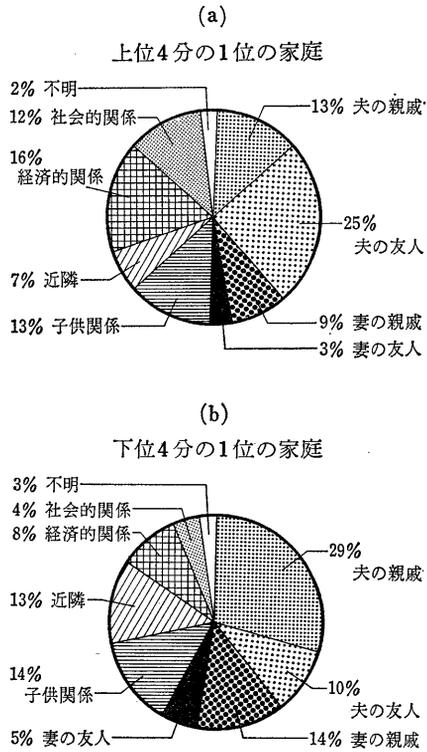
これは村の関係です。父の村、母の村、母の父の村とか村の相違のことです。これはトロブリアンド島がどういいう社会構造になっているのか説明をしなければ容易に理解できませんが、要するに日本語の「近い・遠い」では理解できません。こういう社会の場合、「つきあい」という言葉をどう使ったら良いかということですが、つきあいは最も内側の円では、我々の家族にあたるような関係で贈与の関係は出てきません。贈り物をする意味がないのです。中間の円、または外側の円で初めて贈り物の意味が出て来ます。わかりやすい例をとりますと、このカテゴリー分析ではお父さんや自分の母も中間の範囲にありますから贈り物はして良いわけです。最内円の兄弟関係とは異なり、父母には贈り物をしなければならぬ。これを「ウリグル」といい、息子から親へ定期的に贈り物をします。芋がとれたときに必ず届けなければならぬ相手、これは父親です。母親と息子は同族であっても父親とは一族が違いますから、あたかも我々が遠い親戚に贈るのと同じような感覚で父親に贈

り物をする。父親というのは特別にウリグルという、とれた芋を贈る関係になっているわけです。

## 五 日本における「つきあい」の型——均衡的互酬性として

親しさという問題を考えたとき、親しい人間と親しくない人間に対するつきあいが全く違う。これは遠い近いの問題ではありません。親しさがどのようにルール化されているのかという事に繋がってくるわけですが、日本ではこういうのは余り範囲を広げていくことができない。が、一つ親元との親しさというのは、調査してみるといろいろな地域ででてきます。母方の実家と子供との関係、母と子の関係は非常に親しくて、日本に家族というのがあるのかと、日本には今、家族が存在しないのではないかと思う位です。家族、ファミリーというのは形容詞では親しい (familiar) という意味ですが、実は日本では家族がなくて母と子の関係だけがあるのではないか。これがもしいえるとする父親が除かれ「父親なき社会」というのが社会心理学の本にありましたけど、日本は伝統的にどうも父親なき社会であったのではないか。だから今、父親が懸命に子供につくすけれども、これがいえたすれば、やはり無理ではないかと思えます。家族というのは父と母を共に含むのが建前で

第2図 日本人の贈答の相手  
(栗田：1984による)



すが、親しさ、ファミリーという言葉を使うならば、母親と兄弟と自分という関係が親しいですからね。こういうことでいろいろな連想を巡らせるわけです。

これに関連して、つきあいと人間関係の問題で参考になると思われるのは第2図です。これは国立民族学博物館の栗田靖之さんという人が日本のデータに基づいて集計したものです(「心理的評価と互恵性について」、伊藤幹治他編『日本人の贈答』、ミネルヴァ書房、一九八四所収)が、

これをみますと、どういう人につきあっているか、贈物をやっているかということがわかる。(a)の上位四分の一というのは非常に交際関係が広い家庭、(b)の下位四分の一は統

計的に交際関係が狭い、家庭のことをいいます。

(a)で親戚関係だけをひろって見ますと、夫の親戚一三%、妻の親戚九%、計二二%、友人関係でみますと夫の友人二五%、妻の友人三%、計二八%、つまり交際関係が非常に広い家庭においては親戚よりも友人関係のウェイトが大きい。経済的關係、社会的関係もかなりウェイトをもっています。ところが、(b)のつきあい関係が狭い家庭をみますと、夫の親戚二九%、妻の親戚一四%、計四三%、ほぼ半分が親戚関係で占められています。逆に(b)では友人関係があわせて一五%、近隣関係が一三%、経済関係、社会関係がそれぞれ八%と四%で、非常に少なくなっています。これは日本の傾向と言って良いと思いますが、交際関係が広くなればなる程、親戚のウェイトが低くなっていく。交際関係が狭くなればなる程、親戚のウェイトが高くなっていくということがこのグラフに表われています。

次にはどういうときにつきあうのかということが問題となります。以後、話は贈答関係とつきあい関係の問題にしばって話してみたいと思います。(ことのやりとりであるお世話したか、しないかというのは調査対象としてはつき

りしないのに対して、ものやりとりである贈答は非常に  
はつきりしているからです。）どういいうきっかけで日本人  
は贈り物をするかという点、これはたいへんな数の機会に  
及んでいます。どういいうものがあるかという点、通過儀礼  
関係では、妊娠、生産から葬式、法事、命日まで。年中行  
事関係でみると正月から始まってバレンタインデー、クリ  
スマスから歳末まで。その他、旅行、留学、転宅、出張、  
訪問、依頼、情報提供、子守り、など随分たくさん契機  
があります。さらに贈与品名のリストには、お年玉を始め  
として、中元、歳暮、お見舞いから景品、チップ、謝礼ま  
で含まれます。まあ贈物としてあげられるものの名前がこ  
れだけあるわけですね。

つきあい、贈り物はきっかけがなければできない。きっ  
かけを利用したうえで贈り物をする、相手もやはりきっか  
けを利用して返すということを通じて均衡的な互酬性が成  
立します。それには(一)空間的契機、(二)時間的契機、(三)心理  
的契機の三つの種類があります。(一)空間的なきっかけとい  
うのは、内と外という空間的な関係があり、例えば外から  
内へきたときどうするかという点、人々は「お土産」を持  
参したり、転居したときには転居の「挨拶」をします。こ  
れもつきあいの表現の一種です。それから内から外へ出て  
いくとき「餞別」をあげます。空間的な村とか家に入って  
くるとき贈り物がなされて、つきあいが生じるきっかけに

なります。(二)時間的きっかけというのがあります。時間と  
いうのは真直ぐ進んでいなくて非常に歪んでいるんですね。  
十は祝いという概念、神に近づいたときとか喜びのときで  
す。<sup>アイヌ</sup>人は人が死んだり事故があつたりの、お悔みとか悲  
しみのときです。時間は常に同じような質で流れていくの  
ではなくて、そこにはさまざまなきっかけによってプラス・  
マイナスの質差が発生している。「通過儀礼」という概念  
はこのことに関連しています。人生の上での祝いや供養、  
結婚式とか葬式とかいうようなきっかけ、こういうきっか  
けは時間的きっかけです。卒業したとき、成人したとき、  
就職したとき、全てそういうきっかけに贈り物が贈られる。  
さらに正月やお盆といった「年中行事」においても贈り物  
がいたりきたりします。新築祝いなどのように時に応じ  
て行う「随時儀礼」も贈答のきっかけとなり、そこで我々  
は「つきあい」をします。(三)それから心理的なきっか  
けがあり、これは贈り手が受け手に対して負目を負って  
いるときに「賄賂」というのが流れます。逆に贈り手より受  
け手のほうが地位的に低い、負目が大きいときも、「おご  
ってあげるよ」とかいう言葉を伴ってものが移動します。  
こうした心理的なギャップも贈答のきっかけとして考えら  
れます。機会にはいろいろありますが、まとめてみるとこ  
んなことなんです。

いづれにせよ人類学という境界線を通過するとき、そう

いう時に贈り物がなされつきあいが行なわれるということ  
です。つきあいといっても日常行き来をしているだけでは  
「つきあい」といわないのもそのためです。そこでは目的  
意識が明確化していないわけです。何かきっかけがあって  
初めてつきあいというのがはつきりします。ちょっとした  
目的意識でも持っていないと「つきあい」とは言わない。  
時間的境界、成人式もそうですし、転居なんかもそうです。  
こういうきっかけがあって、つきあいは初めて開始されま  
すし、意識されます。

やはり栗田さんの論文中に統計的な資料で贈り物をした  
相手との仲を調べたものがあります。(図、省略—編集部)。  
これで見てもいきますと、日本では、贈り物をする相手は一  
番仲が良いとも悪いともいえない関係、お世話していると  
もしていかないともいえる関係、つきあいの満足度は満足し  
ているともしていかないともいえる関係ということになりま  
す。贈答関係の相手に対する心理的評価を集計したこの調  
査結果は、都合が良いことに本日の話と結論が一致してき  
ます。つきあいの関係は非常に親しい関係にはないんです。  
また、親しくない関係でも生じてこないのです。「つきあ  
い」においては目上でも目下でもないという意識が最も有  
力になっている。親密度からいくと、仲がいいとか悪いと  
か、そういう関係の人間とつきあっているわけではないの  
です。非常に仲がいいとか悪いとかいうのではなくて、つ

きあいなんだ、贈り物をする相手だと言う。便宜度でも、  
お世話するとかしないとかいう意識の関係ではなくて、お  
世話しているともしていかないともいえない関係である。地  
位も満足度も同じです。我々が普通つきあいというと、仲  
が良くてお世話したりされたりする関係や目上の人との関  
係を思いうかががちですが、実際に贈答についてのアンケ  
ートをとってみますと、なんと「つきあい」は中間領域に  
あるわけです。なんとも評価できない相手に集中していま  
す。

なぜかというのと、「均衡的互酬性」ということにまた戻  
ります。要するに、日本人は釣合いのとれた関係でない  
と「つきあい」はできないのです。釣合いのとれた人間関係  
の人。目上の人や目下の人では、どうしても不均衡です。  
目上の人にはどうしても負目を感じますから、つきあいと  
いう感覚ではない。また非常に親しくなってしまうと、つ  
きあっているという感じがしません、別のものになってし  
まいます。贈り物をあげるということになってこない。均  
衡的互酬性という文化人類学の尺度、このどの部族にもみ  
られる互酬性の一環に、日本語の「つきあい」という言葉  
があてはまるといえます。(文責—編集部)

(わたなべ よしお・前専任・文化人類学)